

## 家も僕の心の中もモヤモヤだった

昼が過ぎてても、僕はぐったりだった。

三時前だっただろう、おばあちゃんが、「ごはん食べるかあ」と起こしに来る。

頭がボーとしていて、朝だと思った。

外が明るいので、寝坊したと思い込み、急いで、制服着た。

「朝めし」と、下へ降りた。

家の柱時計を見ると、昼が過ぎていて、びっくり。

「えらい遅刻や！」とあわてた。  
おばあちゃんがキョトンとしている。

「どうしたんや、寝ぼけてるんか。」  
と言われて、僕は、はっと気がつき、僕は落ち着きを取り戻した。

それから、コタツに入り、テレビを見ながら、僕はひとりモグモグ食べ始めた。

おばあちゃんは、僕の様子を見て、ニコニコしながら、横になった。

そこへ、てるちゃんが、めかし込んで来た。  
お母ちゃんは、おばとこへ、お金の相談に行っていなかった。